きょうちくとうの花

児玉和子
上鷺宮五丁目

今年も、きょうちくとうの花が咲く頃になりました。この花を見る度に、今でも私は、胸を締めつけられる思いがします。

あれは、鹿児島の尋常小学校にセーラー服を着て、通学していた頃のことでした。私達は、木札の名前をつけた白いエプロン姿にランドセルを背負い、お友達とおしゃべりしながら楽しく通っていました。その道の途中、旧制二中(現在の甲南高校)の石塀の内側にきょうちくとうがありました。毎年、夏になると、校内から垂れ下がるように濃いピンクのきれいな花が咲いていました。

きょうちくとうの花。それは、当時、朝夕通う道に咲く、ごく普通の花でした。時には一輪ずつそっと盗んでその場を走り抜け、髪に差し唱歌を口ずさんで歩いて帰宅する平和な毎日でした。

それから九年が過ぎた昭和二〇年六月十七日のことです。その夜は警戒警報のサイレンから、すぐに空襲警報になったのです。

アメリカのB29爆撃機の音がし、とつぜん部屋が真昼のように明るくなりました。雨戸をあけるとあたりは油脂焼夷弾の火の雨。空が真っ赤に燃えています。お隣や近所がどんどん燃え始めました。寝たきりの父を抱えた母は、「今日は防空壕に入ると死んでしまう。鉄筋の中学校に逃げなさい。私達は、荷物の防空壕に入るから、和子は、妹と弟を連れて早く中学校に行きなさい」と、怒るように言います。私達三人は、もんぺ姿に非常食の入った救急袋を肩に掛け、防空頭巾をかぶり、父母を気づかいながらも、門を出て歩き始めました。すると、十メートルくらい先の木の電柱が、道の上にくの字に曲がって燃えています。その下を一人ずつくぐりぬけ、やっとの思いで中学校の門の前に着きました。

中に入ろうとすると、「中に入れるのは、怪我をしている人だけだ」と怒鳴る声で入れず、すぐ近くの道路にあった防空壕に避難しました。その夜は、大人も子どもも一睡もできませんでした。

爆撃の音は消えましたが、真っ暗な真夜中の防空壕の外は、がやがやばたばた騒々しいのです。私達は壕から出て、また、中学校へ行きました。警察や消防団の人、隣組の係の人、軍人、看護婦さんなどが大声で何か言っています。何を言っているのか分かりません。

しかし、名前を叫びながら、自分の家族を捜す人の声だけは妙に耳に残りました。私達子ども三人も、「父母が来てくれている」ことを願いながら捜し始めました。

頭や顔をやけどして木の椅子に腰かけている人がいます。まるで透き通ったボールを両手に持っているかのように手のひらが丸く膨れ上がって痛そうです。ぼうぜんとこちらを見ているうつろな眼。手や足などをぶら下げ、放心状態で痛い痛いと叫んでいる人達など、学校は土間のところまでいっぱいです。その人達をかき分けるようにして教室をのぞくと、そこは顔や手足がとけて目鼻も分からないくらいに、ひどいやけどをした人達が、治療してもらっている臨時の救急室でした。

「水を、水を……」と泣き叫ぶおじさんやおばあさん、またバケツで水を飲んでいる若者。「おとうーさーん、おかあーさーん」と三人で代わる代わる呼んでみても、父母の返事はありません。一人ひとりの顔をのぞいて見ても分かりません。私達三人は、擦り傷ひとつありませんが、あまりのひどさに気分が悪くなりそうで、外へ出てしまいました。

もう明け方で薄明るくなっていました。

五、六人の人が、校舎と石塀の間にある、自転車置き場の方に重そうなものを運んできました。「何かな……?」と思って見に行くと、そこには、なんと十数体の遺体が並べられているではありませんか。もしかして、父や母が、と思い一人ひとりの遺体を確かめて歩きました。すると、なんと、そこにはお友達の顔がありました。みんな死んでいる。妹さんやお父さんお母さんもいっしょに遺体となって、一族枕を並べて横たわっていたのです。

私は、そっと、石塀のきょうちくとうの花を折り、一枝ずつ全部の遺体に供えて、安らかにお眠り下さいと、ご冥福をお祈りしてまわりました。

それからです。毎年きょうちくとうの花を見ると、あのひどかった戦争時代を思いだすのです。その時死んでいった人々のことが今でもまぶたに浮かんできて、胸を締めつけられるような思いがするのです。

このような悲惨な戦争は、二度とあってはならないと思います。